8月8日　4校目

2017年度　滝高校　愛知県大会出場作品

飛べない鳥は夢を見る

瀧　源作　作

■ＯＰ（本能寺の変）

光秀　敵は本能寺にあり！　攻めろ！　火をかけろ！

舞台中央に織田伸子が背を向けて立っている。
明智の兵達、刀などを手に、信子を取り囲む。

信子の部下たちが走りこんで来る。

武士１　御館様！　御館様！　謀反にございます！

武士２　敵方の軍勢、夜の闇に紛れて本能寺を取り囲んでおります！
武士１　火の回りが速く、逃げることも立て篭もることも難しくございます。
武士２　残念ながら、織田家の命運、もはや、これまでかと。
武士１　天下統一まであと一歩となりながら・・・無念でございます！　ヨヨヨ・・・

信子、振り返る。

信子　あー、泣くな、泣くな！　うっとうしい！
武士１　御館様。
信子　ふーん。私もここまでか。もう一歩だったのになあ。
武士２　くやしゅうございます。
信子　勝つも負けるも、戦国の世の習いだ。で？　裏切ったのは誰よ。
武士２　明智光秀にございます。
信子　あいつが？　あの忠義者が？　ふーん。・・・やるじゃん。

舞台の別の箇所に照明。戦装束の男、明智光秀。

光秀　攻めろ！　火をかけろ！　御館様の首を落とせ！　織田家を根絶やしにするのだ！

武士１　最後のご奉公にございます。
武士２　せめて一太刀あびせて参ります。
武士達　しからば、ごめん！

武士１・２、明智の兵に向かっていく。

信子　光秀ー！　おーい！
光秀　御館様！？
信子　それでー？　なんで私を裏切ったのー？
光秀　天下が、ほしくなりました。それではいけませんか。
信子　いいよー。
光秀　いいんですか！
信子　でもねー。馬鹿でしょあんたはー。これから倒そうっていう相手に、様をつけてどうするのよー。
光秀　なっ…
信子　そんなんじゃ、天下を治められないわよー。
光秀　うるさいっ！　・・・そんなことは、わかっております。
信子　ふーん。じゃあどうしてわざわざ？　私を殺しても、天下は自分のものにはならない、とわかってて？
光秀　・・・・。
信子　（すごみをきかせて）なぜ裏切った！　答えよ、光秀！
光秀　・・・仕方が無かったのです。
御館様の天下統一、その野心に惚れて、あこがれ、ついてまいりました。
しかし！　御館様の作るクニは織田家だけのもの！
そこに我ら、明智の家の居場所は無い見込み。
信子　・・・まーね。さすが光秀、よく気づいた。
光秀　やはり。では、私は明智の家のため、一族のために、あなたの野心を阻まなくてはなりませぬ
信子　あー、そうか。そういうことか。遠くを見るあまり、足元の石ころにつまづいたか。
光秀　その通りです。
信子　じゃ、しかたないね。
光秀　ええ、仕方が無かったのです。御館様のあとは、私が継ぎます。
信子　あはは、無理無理無理。そうだねー、おまえじゃ、もって三日ってとこだよ。
光秀　三日って・・・。
信子　短い間だけど、楽しむといいよ。天下人の椅子。あーあ。楽しかった。ははは。

信子、舞台奥へ。炎と明智兵に姿をかき消される。

光秀　・・・。火をかけろ！　絶対に逃がすでないぞ、寺ごと焼き殺せー！

炎の音が上がり、建物が崩れる音。光秀のみに明かりが残る。

光秀　織田信子、この明智光秀が討ち取った！
織田家の一族は皆殺しにしろ！　明智の一族が生き残るため、根絶やしにするのだ！

■一場（細川邸）

明智光秀の娘、珠子とその夫、細川忠興。二人で、あやとりをしている。

珠子　ほら、次は忠興様の番ですよ。
忠興　う～ん、ここをこうするのだな？　ん？
珠子　ふふふ。
忠興　う～ん、こうであったか？
珠子　ふふふ。
忠興　教えてくれてもよいではないか。
珠子　秘密です。最初に教えて差し上げました。
忠興　こうだと思うのだが・・・。

いと・しのが通りかかる。

しの　違いますよ。ほらそこの糸を下からすくって・・・
珠子　これ、しの。教えてはなりません。
しの　あら、失礼いたしました。きびしいお嫁様ですこと。
忠興　そうだなあ。いと、新婚早々これでは先が思いやられるな。
いと　かかあ天下の方が、家庭は安泰だと私の里では申します。
しの　それに今は女性が強い時代。織田家の頭領信子様もご活躍のご様子。
珠子　女だって天下を取れる時代なのですわ。
忠興　はっはっは。女どもはみんな珠子の味方だな。では、珠子。ともに戦に出かけるか。
珠子　あやとりもできぬ不器用な旦那様とでは、怖くて行けませんわ。
忠興　なんだと。
珠子　だから、待ってますから、守ってくださいね。
忠興　降参じゃ、降参。珠子にはかなわんなあ。
しの　あ～、あついあつい。私は涼みにでもいきましょうかね。
いと　これ、しの！　失礼します。
珠子　あら、ふふふふふ。

細川家家臣、小笠原輝清登場。忠興に手紙を渡す。

輝清　殿、織田家中より急ぎの知らせにございます。

輝清の去り際に、光秀登場。

輝清　あ、光秀殿・・・

珠子　父上様！

光秀　おお、珠子。

珠子　ちょっと、どうされたのですか！

光秀　お前の顔が見たくてな。

珠子　まるで戦にでも出られたご様子・・・。

忠興　光秀殿。

光秀　おう忠興くん。

忠興　これは・・・まことでございますか。（手紙を差し出す）

光秀　（手紙を一瞥して）知らせが入っておったか。

忠興　ご乱心か。光秀殿！（珠子、忠興から手紙を奪い目を通す）

光秀　天下を取ったのだ。御館様の足元をすくって、な。

珠子　父上様！　織田家に逆らうなんて、どうしてそんな　だいそれたことを！

光秀　言うな珠子。こうしなければならなかったのだ

珠子　信子様は明智家にとって恩人のようなお方、なのにどうして・・

光秀　ええい、だまれ。お前のでる幕では無い。

忠興　珠子は向こうに行ってなさい。だれか。

いと　はい。（入ってくる）

忠興　珠子を連れて行ってやってくれ。

いと　さあ、珠子様。

珠子　いやです。ここにおります。

忠興　わがままを言うでない。

いと　ささ、珠子様。

珠子、しぶしぶ退場。

光秀　忠興くん、苦労をかけるね。

忠興　いえ。

光秀　さあ、これから忙しくなる。明智と細川が手を組めば新しい世も開けるというものよ。

（忠興に）ともに戦ってくれるな。そなたがいれば百人力だ。

忠興　・・・お断り致します。

光秀　それは本気で言っているのか。
忠興　本気でございます。織田家中においては、今となっては、明智を討つことこそが天下取りの大義名分！　多くの者が敵に回ります。
いや、それだけじゃない。御館様の後釜を狙っていた者にしてみたら、これは絶好の機会。「織田ならずとも明智くらいは」と考えることでしょう。
光秀　策は打ってある。御館様の第一の家臣、明智光秀をみくびるでないぞ。
忠興　光秀殿のご実力はわかっております。しかし私は細川家当主。危ない橋は渡れません。光秀殿とはこれきりかと。
光秀　わかった。・・・珠子を頼む。

■二場（政権交代）

光秀に単サス。武士達、光秀の後ろに控える。

光秀　さあ、天下取りはここからが本番。皆の者、戦の準備にかかるのだ！

武士達は、攻め込むポーズをとる。

ひで　スキあり～！！

光秀は、背後から走り出てきたひでにハリセンで張り倒される。武士達びっくり。

ひで　はあ、はあ、はあ、皆のもの－！　私、豊臣ひでが、信子さまのかたきを取りましたー！
光秀　おぬし、いつの間に！
ひで　（光秀を足蹴にして黙らせる）御館様のかたき、同じ女性の私が取らずして誰が取ろう。

武士達、ひでにひれ伏す。

ひで　ふっふっふー、これで、天下は、私のもよー！　ライト～！　オン！

照明舞台全面へ。軽快な音楽。

ひで　こんにちは。豊臣ひでです。
私、こう見えても農民出身なので、農民に優しい政策取っちゃいま～す！
まず、刀狩り。皆さんのおうちにある武器は、み～んなお寺の建設に使っちゃいます！

これで戦に駆り出されることもなくなるし、これでみ～んな極楽行き！
国の基本は農民だからね！

舞台袖から農民達の大きな拍手。舞台上の武士達はまばらな拍手。

ひで　（武士達にむかって）って、むこうには言ったけど、本当はみんなあんたたちのためだってわかってる？　刀狩りで農民を武装解除しといてあげるから、あとはうまいことやっちゃってね～！　さあ、天下統一まであとちょっと。がんばっていこ～！

武士達、大きな拍手。武士達の称賛を満足げに聞くひで。

武士５　さすがひで様！
武士４　ついて行きます！
武士２　我らのことを考えてくださっている。
武士１　すばらしいお方だ
武士７　良い世の中になりそうじゃ
武士６　これで天下は安泰だ

石田三成登場。反対方向に忠興と珠子。

三成　待て！　あれを見よ。
武士７　あそこにいるのは
武士３　細川殿？
武士５　横のおなごは
武士６　顔がよく見えん。
武士１　あれは！
武士４　知っているのか？
武士１　珠子様です。明智珠子！
武士全　御館様の仇！

忠興・珠子を取り囲む武士達。三成はひでの近くにいる。

武士７　明智の娘だ。逆賊の娘。
武士２　おのれ、明智の者がまだ生きておったか！
珠子　今は細川忠興に嫁いでおります。もう明智の家と関係はありません！
三成　しかし光秀の娘には違いない

武士３　父を殺され恨んでいよう
武士６　汚れた血をひく者だ。
珠子　そんな！
武士５　いずれこの世にあだなすものになるだろう。
珠子　そのようなこと、決していたしません！
武士４　裏切り者の言うこと、信じられぬわ！
三成　さあ、細川殿！　奥方を差し出していただこう。
忠興　皆様方、これは私の家のこと。身内のことは身内で処分いたしますゆえ・・・
三成　細川殿には奥方を差し出せない理由があるのかな？
武士６　細川殿は明智と繋がっているということか。
忠興　そうではない。
武士３　信じられるか！
武士２　この裏切り者が～！

いきり立つ武士達

忠興　珠子、明智殿は戦に敗れた。お前の血を、明智の血を疑う者は、世に溢れている。
珠子　私はあなたの妻です。明智の名は捨てております。忠興様！
忠興　恨みをお前にぶつける者もいるかもしれん。

三成　奥方を差し出さぬこと。ひで様への謀反とみなす。
武士７　ひで様。細川討伐のご命令を！

忠興　（わざと大きな声で）ええい、（珠子を大げさに突き放す）俺も、お前の父のことが許せない。おまえは逆賊明智の娘。私の許しがあるまで、この座敷を出ることはまかりならん！　よいな！
珠子　忠興様！　嫌です！　私の話を聞いてください！　忠興様～！

閉じ込められる珠子。

忠興　ひで様、光秀の娘、私が責任を持って監督いたします。ご安心を。
ひで　わかった。じゃあ忠興にまかせるわ。
三成　ひで様！
ひで　私は慈悲深いの。だから、これからも、豊臣家に尽くしてね。
忠興　は。

忠興、去る。

三成　ひで様。

ひで　な～に、三成。そんな顔してないで、言いたいことがあるなら言ってよ。

三成　明智の娘を生かしておいては、謀反の種になるかもしれません。それをみすみす・・・

ひで　ばかねえ、三成は。あれは何もできない女。私とは違う。生かして置いても問題ないでしょう。

三成　ですがひで様・・・

ひで　それに、あの女が生きている限り、忠興も何もできはしないわ。

三成　そうでしょうか・・・

ひで　そうよ～。さーさーみんな、あんな子のことは忘れて。新しい時代の始まりを祝って、ぱーっといきましょう！

武士達の歓声。

■三場（座敷牢の中）

座敷牢の中。ちよとしのがなんとか珠子の気を紛らわせようと苦心している。小笠原輝清もそばに控えて見張っている。

ちよ　珠子様。お茶が入りましたよ。

珠子　いりません。喉はかわいてません

ちよ　じゃあお菓子はどうですか？　これ、おいしいですよ

珠子　いりません。お腹もすいてません

ちよ　そうですか。

しの　じゃあじゃあ、にらめっこでもしませんか？

珠子　やりません。　もう放っといて！

侍女達　・・・

いと　しの、ちよ。

いと、やってきて二人の侍女に戻れの目配せをする。後ろに控える２人。

いと　珠子様。

珠子　・・・。

いと　わかりました。放っておきます。

珠子、そっと外に出ようとする。

いと　外に出てはいけません。

輝清　珠子様、どうかおわかりください。忠興様のこのような処置、すべてあなた様のためでございます。

珠子　私のため？　これが？　この座敷に押し込められて。どこにも行けずに、誰にも会えずにいるのが私のためって言うの？

輝清　そうです。

珠子　こんなの牢屋といっしょじゃない。

いと　わがまま言わないでください。

珠子　もう嫌です。外に出しなさい。

いと　珠子様。

輝清　明智の家は取り潰し、珠子さまはここから出なさっても、どこにも行くところはございません。

珠子　・・・わかってるわよ。

しの　珠子様、お外は危険です。

ちよ　まわりからどう思われているか、珠子様もおわかりでしょう？

しの　でも、ここは安全です。

いと　気がふさぐこともあろうかと思いますが、私たちがおります。

珠子　・・・。

いと　旦那様も珠子様の事を想ってこうなさったのですよ。

珠子　・・・。

いと　ね？

珠子　それはどうだか。あの人は私がお嫌いなのです。

いと　そんなことはございません。

珠子　私にはわかるの。あの人は信子様をお慕いしていたから、父上様が、明智の血が憎いのだわ。

いと　父上様に協力しなかったのも、私を閉じ込めるのも、みんなそのせい・・・

珠子　そんなことはございません。

輝清　忠興様は私を閉じ込めて以来、顔も見に来ない。

珠子　九州に赴いていらっしゃるのです。ひで様のご命令で、島津氏の討伐に。

しの　今度はひで様ひで様なのね。私のことなんて、もうどうでもいいんだわ。

ちよ　そうではありません。

珠子さまのために、ひで様に忠実に振舞っているのです

いと　声が大きい。
ちよ　すみません。
しの　さ。改めてお茶でもいかがですか。お菓子もございますよ。
いと　珠子さまのお心が晴れるのならば、なんでもお手伝いしますよ
珠子　心が晴れることなんて、もう、ないわ。
ちよ　珠子様・・・。
しの　珠子様、何か、楽しいことをいたしましょう。最近はやっている遊びなどいかがですか？
珠子　結構です。・・・父上様も、なんであんな事したのかしら。
いと　なにか、お考えがあってのことでしょう。
ちよ　そうですよ。きっと。
珠子　そんなもの、きっとないわ。
輝清　・・・男には立ち上がらねばならない時があるのです。
珠子　残された者がどうなるのかも考えず？
輝清　そんなことは。
珠子　だってそうでしょ？　私は一生、罪人の娘として生きるのだわ！
いと　珠子様。今は気がふさいでございます。だから悪い方悪い方に考えてしまうのですわ。
珠子　信子様は私にとっても大切なお方だったのに！
しの　珠子様、落ち着いてください。
珠子　父上様は愚か者です。あのようなお方、死んで当然です・・・
いと　言葉が過ぎます。言って良いことと悪いことの判断もできないのですか。
珠子　・・・わかってるわよ、わかってる。お前達の言うこと、全部わかってるわよ。
でも、どうしようもないの。お姉様もみんな殺された。私を一人にした父上様を恨まずにどう生きろというの？　明智を見殺しにして、私を閉じ込めた・・・忠興様の何を信じろというの？　私は、私は・・・。
いと　珠子様・・・。いとが、いとがおります。

泣き崩れる珠子。それに寄り添ういと。

■四場（忠興の世界）

笑い声。忠興・ひで・三成や武士達登場。

三成　細川殿、いくら無礼講とはいえ・・・
ひで　うるさ～い。わたしがいいって言ってんの！
三成　しかし、ひで様は全国を平定され、今や天下人。そのようなお方に・・・。

ひで　もう。そんな顔ばっかしてると、しわが増えちゃうぞ～！　ねえ、忠興。
忠興　！　はい！
武士達　ははは。
三成　細川殿！
忠興　失礼いたしました。
ひで　ふふ。忠興はおもしろい男ね～！　三成も見習うといいわ。
三成　私は、真面目なのが取り柄ですから。
ひで　堅いわねえ。
武士３　そうそう。三成殿もおなごの格好をすればよいではありませんか。
武士６　絶対かわいいと思います。
武士５　さあさあ、着替えた！　着替えた！
三成　私は、生まれてこの方、おなごの格好をしたことはありません。
武士１　女に生まれながら、そんなことはありますまい。
忠興　いやいや、ならばなおのこと、余興にはもってこいじゃ。
武士４　今から着替えられてはどうでしょうか？
武士６　それは妙案！
三成　恐れながら申し上げます。この三成、石田家の第一子として生まれ、乱世において猛々しく生きよと、父より男の名を授かりました。その私が、おなごの格好をするなど、石田家を裏切るのにも等しい行為、どうか、ご容赦くださいませ。
武士７　・・・石田殿。酒の席での話じゃないか。
三成　しかし・・・
ひで　もう、いいじゃない。皆の者、無礼講よ。はじけちゃって！　いぇーい！
武士達　いぇ～い！

ひで達、踊りながら退場。

■五場（座敷牢）

珠子　今日も昨日と同じ一日が過ぎていくのね。
いと　そうですね。
珠子　生きてるのか死んでるのかもわからない１日が。
いと　またそのようなことを・・・。
ちよ　忠興さまはまだ顔を出してくださらないのですか？

しの　もう少し珠子様のもとにいらしてもいいじゃないねえ？
ちよ　九州からはもうお戻りのはずなのに
珠子　どうせ、ひで様の元にでも行かれてるんでしょう。
　　桃太郎にきびだんごをもらった、犬みたいにね。
いと　そのような言い方はおよしください！
珠子　わかってる、私こそ犬なんだわ。
　　飼い主の手に噛み付いた、馬鹿な犬の娘だもの。
　　こうして檻に閉じ込められているのがお似合いなのだわ。
しの　檻だなんて、そんな
ちよ　珠子さま、忠興さまは珠子さまのことを思って、このお屋敷でかくまってくださっているんですよ
珠子　そんなの私は望んでいない！　私だって、外に出て、できることはあるのに・・・
いと　今はこらえてください。
珠子　いつまで。
いと　世の中が、変わるまで…
珠子　世の中なんて変わらないわ。何も変わらない。私はずっとこのままよ。
ちよ　そのようなことはございません！
珠子　いいじゃない。私が独り、この座敷の中で何を言ったって誰も聞いてないんだから。
しの　珠子さま・・・。
いと　そうです、珠子様。誰も聞いていないなら、ここは自由じゃないですか！
　　好きなことを、思いっきりおっしゃいませ。
ちよ　そうですそうです。私たちしかおりません。好きになさいませ。
しの　いっそ相撲でもいたしましょうか。私、手加減いたしませんよ。
珠子　お前達・・・。
いと　豊臣の世はいつか、終わります。そうすれば、お父上様の罪も許されるでしょう。
　　それまでここで、私たちと一緒に過ごしましょう。
輝清　（妙な場所から突然登場）こら、お前。滅多なことを言うでない。
　　誰かに聞かれたらどうするのだ。
珠子　輝清！　聞いていたの！
輝清　壁に耳あり障子に目あり、床の下にはこの小笠原輝清あり、でございます。
いと　ちょっと、無礼なのでは
輝清　申し訳ございません。しかしこの輝清、忠興さまより直々のご命令にて、珠子さまから目と耳を離さぬよう申し付かっております。
　　失礼は承知ながら、この耳に全身全霊を傾けて盗み聞きいたしております
珠子　ああ、もう嫌！　自由なんて、私にはどこにも無いのね。
　　もういい！みんな出て行って！

■六場（侍女達の相談）

いと　輝清！（侍女たちで輝清を引っ張っていく）
輝清　何だ
しの　ほんとーにアンタって人は！
輝清　なんだその口の利き方は！
ちよ　だまらっしゃい！
輝清　な！
いと　忠興さまのご命令とはいえ、このように閉じ込められていては珠子さまの身も心も弱る一方。それでは、お守りすることにならないんじゃありませんか？
輝清　しかし、そうは言うものの
いと　主の心を安んじるのも家臣の務め。そうですね？
輝清　は、それはたしかに、その
いと　それで、ですね。珠子さまのお加減がよろしくありません。
　お医者さまをお呼びしたいのです
輝清　それは一大事。この輝清、ひとっ走りかかりつけのお医者さまに
いと　いえ。それにはおよびません。珠子さまの病はお心の病。
　お屋敷から一歩も出ることのかなわないがゆえの、気ふさぎの病です。
　ただの医者ではなく、私が存じているお医者さまをお呼びしたいのです
輝清　ほう、それは、しかし、忠興さまに・・・
しの　輝清。あなたのせいで！　珠子さまのお加減が余計によろしくないんですよ
輝清　そんな。・・・それでは、お任せいたします。
いと　ただし、監視は禁止です。
輝清　え！
ちよ　え？ちょっと待って？　まだのぞこうとしてた？
しの　そんな変態みたいなこと、しないでしょ～？
女３人　ねぇ？
輝清　は、はい。

　輝清、べそをかいてはける。喜ぶ侍女たち。

いと　では。珠子さま、楽しみにしていてくださいね

　しの・ちよははける。

■七場（座敷牢）

いと　珠子様。お客さまが来られましたよ
珠子　私にお客様なんて・・・。
ちよ　ふふふ。ではどうぞ！　お入りください！

神父たち登場。（音楽に合わせて踊りながら、とかやれると面白い。

珠子　なんなの？
神父１　はるか海の彼方、イッターリアから参りました　天主教宣教師、オルガンティノと申します
神父２　アコーディオと申します
神父３　カストネッタと申します
神父１　どうぞよろしく、お見知りおきを。
珠子　海の向こうから？
神父２　地球の反対側からです。
珠子　地球って何よ
神父３　この世界のことです。
神父１　どうぞ、ごらんください。（地球儀を取り出して珠子に投げ渡す）
神父２　私達ははるか海の彼方、地球の反対側。ヨーロッパはイタリア、ローマから参りました。
神父３　ポルトガルから船に乗り
神父１　アフリカの喜望峰を越えて
神父２　インドではカレーを食って
神父１　はるばるこの日本までやってきたの、デス！
神父３　（ぎざったらしくプロポーズするように）あなたに会うためにごめんなさい、何を言ってるか全然わかんないわ
珠子　おっと…
神父１　ちょっと飛ばしすぎましたかね
神父２　いやいや、このような美しいレディにお会いしたので、舞い上がってしまいました。
神父３　ははは
神父１　いとさん、この方があなたのご主人、珠子さまですね
いと　はい、オルガンティノさま
珠子　いと、どういうこと？
神父２　おや？　いとさんからお聞きでない？

珠子　なにも
神父１　私達はいとさんから、座敷にひきこもって食っちゃ寝して愚痴を言うしかすることがない残念美人がいると聞きまして
珠子　は？
神父２　放っとくとぐじぐじしすぎてナメクジになりそうで心配だとも言われまして
珠子　はあ！？
神父３　それならば私達がスピリチュアルにマインドをオープンしてさしあげよう！と！
このようにおうかがいした、次第でございます
珠子　ちょっと！　いと！
侍女　ああ、そんなこと言ってません！　ちょっと、神父様！
神父１　隠さなくてもいいんですよー
神父２　私達には何もかもお見通し
神父１　あなたの心の声を聞き取って、私達は感じ取ったのです。
神父３　救いを求める、迷える子羊がここにいることを。
珠子　え、あの、その
神父２　さあ、めくるめく神の愛の園へ、ご一緒に
神父３　大丈夫、全然怖くありませんからね
珠子　え、いや、きゃー！
侍女　いい加減にしてください。私は珠子様のお話し相手をお願いしたのです。
神父３　おおっと、これは私としたことが。
神父２　いや、このような美しい方とお会いすれば、無理もありません
神父３　迷える子羊を救う勤めを忘れ、私が狼になるところでした。
神父１　天主様、私たちの一時の気の迷いをお許しください。
神父達　アーメン。

珠子　ふふっ。おもしろい人達。
いと　やっと笑っていただけましたね。
珠子　だって、おかしいんだもの。
神父３　おかしいとはひどい。
神父２　私達はいつだって真剣です。
神父１　そう、私達は愛を地球に広げるため、旅をしてきたのですから。
珠子　はるばる海を渡って、この国に？
神父２　はい。私達は天主様の愛の教えを広めるため、地球をあまねく旅する使命を負っているのです。
珠子　教えって？
神父２　ラブ

神父１　アンド
神父３　ピース。
神父１　主は天にいませり。
神父３　地は平和を。
神父２　そして人には愛を！
輝清　（割り込んでくる）珠子さま！　このような者どもとお話なさってはなりません！
いと！そなた何を考えておるのだ
いと　私は、珠子さまのことを思っているだけです
珠子　輝清！
輝清　は！　盗み聞きはご容赦くださいませ。ですがしかし！
珠子　お前さえ、黙っていてくれれば。何も問題ありませんね。
輝清　そういうわけには参りません
珠子　ではこの者達を座敷に通した失態は
輝清　腹かっさばいてお詫び申し上げます！
珠子　座敷が汚れますね
いと　外でやってください
神父３　おお、これが噂の、サムライのハラキリですか
神父２　まさか目の前で見られるとは。
神父１　野蛮な習慣ですね
輝清　お前らのせいだろうが！
いと　まあまあ。これであなたも共犯です。どうか忠興様には、このことはご内密に。
輝清　・・・わかりました。見ざる言わざる聞かざる、とします。私としたことが…。
いと　いかがですか。珠子さまも、この国のことに関係ない方たちが相手なら、
お父様のことも何も、気にせずお話できるのでは
珠子　そうかも、しれない。ねえ、あなたたちの話を聞かせて？
神父２　そうですね。あなたの知らない世界。見たことの無い景色の話をいたしましょう。
神父１　私たちは芸術とアモーレの国イタリアに生まれました。
神父３　そこで神の教えと出会い、この教えを世界に広げるためにポルトガルの王に協力を求めに
来たのです。
神父２　そこでなんと私たちは大歓迎を受けたのです。
神父１　連日の舞踏会はそれは見事なものでした。
珠子　舞踏会？
神父２　うたげ・・。宴会のことでございます。

人々登場。笑ったり酒を要求したり、宴会をしている。

人々１　お～い、酒もってこ～い！
人々２　は～い。ただいまぁ。

珠子　それなら、この国にもあるわ。
人々　うん！
神父２　いえいえ、踊りを踊るのです。
珠子　踊りねぇ・・・。
神父１　とっても！　優雅な！　踊りです！　こう！

宮廷音楽。人々、男女がペアになり社交ダンス。くるくる回る。

珠子　これが宴会なの？
神父２　そうです。これがヨーロッパの宴会。
珠子　ふふふ。素敵！
神父１　さて宴会も切り上げて、おっきなおっきな船に乗り、冒険の旅に出かけます！
出発進行～！

船登場。神父達、乗る。

神父２　大きな船とはいえ、波の強い日は揺れまくり！
神父達　（勝手に揺れながら）うお～！　うへ～！　うきゃ～！
神父１　時に海賊の船に襲われかけたり
海賊　ぐへへへ！　お宝をよこしな！
神父達　ぎゃ～！
珠子　大丈夫だったんですか？
神父２　神の力で改心させました。
神父１　これが目に入らぬか！

印籠を出す神父１。神父３は黄門様然としている。

海賊　はは～（ひれ伏す）
珠子　魔法みたい・・・。
神父２　ちょっと！　また誤解してますよ。
神父１　ここは誤解させときましょう。
神父３　オルさん、アコさんもういいでしょう。はっはっはっは。（水戸黄門風）

神父１　そうしてやっと・・
珠子　　この国に来たのね？
神父１　いえ、たどり着いたは南の国。
神父２　色とりどりの鳥達の歓迎をうけながら、王様にお目見えしたのです。

南の国の王、前へ出てくる。

神父３　王様は鼻が長くて耳の大きな・・・
珠子　　お方なのね？　変わったお方。

王様の鼻が長く、耳が大きくなる。

神父３　いやいやいや、鼻が長くて耳の大きいのはゾウという動物です。
珠子　　え？　王様は動物なの？
人々　　はは～！

人々、象のぬいぐるみか何かにひれ伏す。

神父１　ちが～う！
神父３　王様は鼻が長くて耳の大きいゾウに乗っていたのです！

王様、象のぬいぐるみに乗り、踏みつぶす。

珠子　　・・・。
神父１　ムリでしょ？　ってか、象、こんなんなってるし！
神父３　象は、クソでっかいのです！

船の山台を裏返すとそこにはゾウが。

珠子　　柔らかそう！
神父１　うん。もういいよ。柔らかいことにしよう。
神父２　オルガンティノさま！

珠子　　すごいわ！　私の知らない世界が、そんなに広がっているなんて。
いと　　楽しんでいただけましたか？　少しは、気が晴れたのならよいのですが。
珠子　　ええ、とっても。でも。私の知らないことがいっぱいで、世界ってこんなに広いのね。

いと　そうですね。
珠子　でも、・・・私の世界は、この牢の中だけなんだわ。
神父１　私たちからすると、珠子さまはうらやましくもありますよ
珠子　どこが？
神父１　珠子さまは守られている。旦那さまに。侍女の皆様に。
神父３　輝清にもね
珠子　この座敷は牢屋みたいなものです
神父１　居心地のいい牢屋ですね
珠子　・・・。
神父３　ひで様は私達、天主教徒がお嫌いですからね
神父２　天主様の教えを広めることは、良い顔をされません
神父３　役人にいいがかりをつけられて、牢屋に入れられることも、たびたび。
珠子　大変なのね…。でも、あなたたちは楽しそうだわ
神父２　それは、そうです。私たちは、私たちの望んだ、やりたいことをしていますから
神父１　難しいからこそやりがいがあるのです
神父３　成し遂げたときの喜びを、たのしみにしつつ！ね！
珠子　うまくいかないかもしれないのに？　やってきたことが全部無駄になったとしても？
神父１　それでも、種はまかれます。土に埋もれたとしても。
神父２　冬を乗り越えて、いつか花開くときまで、種は残るのですよ。
神父３　その日がかならず来る、と信じるのが、今日を生きる糧になるのです。
珠子　私の未来は、どこにもないわ。
いと　この座敷があるではないですか
神父１　すくなくともあなたは今日、生きている。
珠子　生かされてるだけよ
神父１　なぜ？　なんのために？
珠子　それは・・・
神父１　意地悪な質問でしたかね。申し訳ない。今日はそろそろ失礼するとしましょうか
珠子　あの。またお話を聞かせてください。海の向こうの話、天主教のお話も。
神父１　かしこまりました。では、これをどうぞ。お近づきのしるしに。
珠子　なんですか、この本
神父３　我々天主教徒の全てが記された本、バイボー。
神父２　この国の言葉では、聖書と呼んでいます。
珠子　聖書？
神父１　お暇なときにどうぞ。またお会いしましょう。では。
珠子　暇なときって。私はここから出られないんだもの。どれだけだって、時間はあるわ。

■八場（禁教令）

ひで　三成。宣教師たちが持ってきた地球。見た？
三成　はい。
ひで　どう思った？
三成　どう、とおっしゃいますと
ひで　・・・もういいわ。ねえ、日本はどこだか、わかる？
三成　あ、はい。ここですね。
ひで　小さいよねー。
三成　・・・それは、その。
ひで　ねえ、もっと大きくしたいと思わないー？
三成　・・・そうですね。
ひで　世界に名前を轟かせて…かあ。やってみたいよねー。
三成　いや、しかしその前に
ひで　よーし。やってみよう。世界征服。楽しいと思わないー？
三成　ひで様。この石田三成、世界の果てまでお供いたします。
ひで　が、その前に。足元を固めるのも肝心かと。
三成　なにかあるの？
ひで　近頃、南蛮人どもの活動が目に余ります
三成　へー。どんな風に？
ひで　盛んに民衆を取り込んでいるのです。彼らの教えに染まった者どもが、寺を壊し、
三成　ひで様のお言葉に逆らいつつあるとか。
ひで　なによそれ、ここは私の国なのよ！　私がこの国で一番えらいのよ！
三成　それなのに何よ、天主教って。そんなの認めない。
ひで　では
三成　天主教を日本から、追放します！　天主教を信じるのは禁止ー！
ひで　あがめるなら、私をあがめなさい！
光秀　では、そのように。従わない者は、いかがなさいますか
ひで　・・・コロス。

■九場（いととの離別）

ちよ　珠子さまー、その本、面白いですか？
珠子　ええ、とっても。

ちよ　天主教の本なのですよね。珠子さまは、海の向こうのいろんな国のお話が
お好みかと思いましたけれど
珠子　あれは、あれで。楽しかったけれど。
この本の中にも、私の知らない話がたくさんあるもの。
いと　私のわかることなら、ご説明しますよ。
珠子　・・・ねえ。いと。あなたは。
いと　はい。（ロザリオを出す）天主様からはマリアの名をいただいております。
珠子　そう。それで、あの神父さまたちと知り合いだったのね
いと　そうです。あの。
珠子　いいのよ。ひで様のご命令なんて。この座敷は世間から切り離されているんだもの。
外にどんな決まりごとがあったって、関係ないわ
いと　ありがとうございます。これからも、お仕えさせてくださいね
珠子　ええ。・・・やっぱりわからないところ、教えて。「汝の敵を愛せよ」とか言葉はわかっても、意味がよくわからなくて。
いと　よろこんで。　お手紙で神父さまにうかがってみましょうか。
ちよ　私も一緒に、いいですか。
いいですよ。では…（一緒に読み始める）

忠興　珠子。今帰ったぞ。

忠興登場。珠子、本を隠す。侍女達、その間忠興が珠子に近づかないようにする。

侍女達　おかえりなさいませ。
珠子　おかえりなさいませ。
忠興　元気にしていたか？
珠子　はい。忠興様。
ちよ　今日はこちらで御食事はなさいますか？
いと　庭のえんどうが育ちましたので、お召し上がりください。
忠興　おお、そうするか。
ちよ　珠子様が、食べやすいよう、さやを取ってくださったのですよ。
忠興　それはそれは珍しい。
ちよ　最近は手伝ってくださることが多いんです。
珠子　この中でも、できることはあると気づいたのです。
忠興　それは良い心がけだ。輝清からも、最近は機嫌が良いと聞いている。（なつめを渡す）
珠子　これは？
忠興　九州討伐のほうびにいただいた。ひで様の花見大会の土産だよ。

珠子　こんな美しいものを…。ありがとうございます。

珠子の受け取った土産を渡され、いと・ちよ、出て行く。

忠興　いや、ひで様の天下人ぶりよ！　たいしたものだ。なにもない野原に七〇〇本の桜を植えて、満開の桜の園を作ってしまうんだからな。豪華絢爛とはまさにあのことだ。

珠子　それはようございました。

忠興　・・・お前も連れて行ってやりたかった。

珠子　私はいいです。本を読んでいる方が楽しいですから。

忠興　何を読んでいる？　さっき洋書を手にしていたであろう。

珠子　それは、その

忠興　まさかお前、（奪い取って、内容をパラパラ見る）・・・天主教か。誰がそそのかした！

全員　・・・。

忠興　輝清！

輝清　・・・侍女のいとでございます。

珠子　輝清！　内緒にしてくれると約束したのに！

輝清　私は細川家の家臣でございます。忠興さまのご命令に背くことはできません。

珠子　そんな

忠興　お前は何をしていたのだ

輝清　面目次第もございません。かくなるうえは、この腹かっさばいて

お詫びを申し上げる所存

忠興　いい。やめろ。いとを呼んでこい。

いと　ここにおります。

珠子　忠興様

忠興　お前は黙っていろ。いと。お前、長年の恩を忘れたか

いと　私は珠子さまのお側仕えがつとめ。この座敷から出ることのできない珠子さまのため、せめてお心がやすらぐよう、手を尽くしただけでございます。

忠興　ふざけるな！　天主教は禁じられていること、広める者は追放されること、

知らないわけではあるまいな！

いと　お言葉ですが！　このお座敷の中だけでのことでございます。

珠子さまは、忠興さまのご命令通り、このお屋敷から出ることなく、外と関わることなく、

自分を閉じ込めてひっそりと暮らしておられます。

そのお気持ちだけでも、お察しください

忠興　黙れ！　逆賊明智家の妻を持ち、生きていくには、ひで様のどんな無茶にも従うしかない。

俺の立場を台無しにするつもりか！

いと　でも…！

忠興がカタナに手をかける。

輝清　手討ちになさいますか

いと　覚悟はできております。

珠子　いと。今ならまだ間に合います。十字架を捨てなさい。

いと　捨てません。

珠子　どうして？

いと　・・・。

忠興　答えよ！

いと　忠興さまは、お優しい。珠子さまのお命を守り続けてきたこと、よく存じております。でも、その優しさが、珠子さまの心を圧しつぶそうとしていること、お気づきくださいませ。私が命をかけて守るものは、珠子さま、あなたの心ですよ。

忠興　座敷が汚れる。出て行け。

いと、出て行く。

珠子　忠興さま！　忠興様は、天主教はお嫌いなのですか

忠興　俺は興味がない。だが・・・ひで様は嫌っておられる。取締りを厳しくするそうだ。お前は、よりによって・・・なんでそんな危険なものに心を惹かれるのだ

珠子　戦の無い世の中が見えるのです、皆幸せで穏やかな、そういう時が来るのだと信じられるのです。

忠興　戦のない世など・・・戦のない世など地上のどこにもない。（出て行こうとする）

珠子　どこへ。

忠興　また、戦のしたくだ。ひで様は、戦をやめるつもりなんてない。俺のいない間、これからも屋敷から出てはならん。

珠子　どうして！　どうしてあなたは私から、何もかも取り上げてしまうのですか。

忠興　・・・お前のためだ。

珠子　こうしてかごの鳥として、死ぬまでこの座敷にいろと言うんですか

忠興　外に出てもお前の生きる場所はない。

珠子　心の自由までも奪って？　あなたが大事にしているのは、私の何なのですか？

忠興　・・・。

忠興、去る。いと、荷物を持って出てくる。

珠子　いと。行かないで。

いと　忠興様にああ言われては、出て行くより他ありません。
珠子　私のためというのなら、ここにいなさいよ。
いと　珠子様。私は天主様を捨てることはできません。それは私を捨てることですから。
　いまの珠子様なら、きっとおわかりになるはず。
珠子　ごめんなさい。私は、私はここから出ることもできない。せっかく守ってくれたのに、
　いとに応えられるものになんて、・・・
いと　なれますよ。珠子さまが願いを口にすれば、それが種となり、芽を出し、いつか花が咲く
　のです。たとえこの目にはみることができずとも、だれかの心に、少なくとも私の心には
　届きます。
珠子　本当に。
いと　ええ、本当に。いとはいつだって珠子様のことを想っております。

ちよ　いとさん！　神父様たちがお役人に捕まったそうです。
いと　そう、では行って差し上げないと。
珠子　お前も捕まるわ。やめて、行かないで。
いと　行けば、何かお力になれるかもしれません。
珠子　でも・・・。
いと　そうしたいのです。珠子様、大丈夫。（聖書を渡す）
　神父様たちもそうして種をまきに来たのです。世界を花で満たすために。

■十場（殉教と聖書）

処刑場。

ひで　そう。どうしても、私の言うことが聞けないのね。
神父２　聞けません。私は、私の信じる神を捨てることはできません。
神父３　天主教を信じたということで殺されるのなら、私は命をささげることもいとわない。
ひで　それならいいわ。あなたたちの信じる神様は、はりつけで殺されたんでしょう。
　同じようにしてあげるわ。

　他の天主教徒たちも連れ出されてくる。その列に神父２・３も加わる。

三成　そなたらは我が国の太閤・豊臣ひで様の通達に背き、天主教を信じ、広めるという罪を
　犯した。のみならず。ひでさまのご厚情により、天主教を捨てれば、命を救おうという
　お言葉にすら耳を貸さず、かたくなに邪教の教えを掲げて逆らった！

ひで　あなた達は、平和を乱す不埒者。世にそれを示すため、また後に続いて道を踏み外す者の出ないように、見せしめとしてここに処刑を執り行いま～す！

座敷牢。珠子が一人で聖書を読んでいる。

珠子　いと。私はあなたのようになれるのかしら。
神父１　汝の敵を愛せよ。
珠子　そんなこと、できるわけない。
いと　いいえ、珠子様。
神父１　敵とは一体誰なのでしょう？
珠子　私の人生を狂わせたお父上様。私を閉じ込め、いとを追い出した忠興様。父を殺し私を逆賊の娘にしたひで様。
いと　そうではございません。本当はお気づきでしょう？
教徒１　何のために、明智光秀は主君に逆らったのか？
教徒２　何のために、細川忠興は世間からあなたを隠したのか？
教徒３　何のために、豊臣ひでは明智光秀を討ったのか？
神父１　彼らには彼らの正義があった。
いと　なのにあなたはそれを見ようともしない。
神父１　憎いと思う相手こそ、愛するのです。困難が大きいと感じれば感じるほど、それを成し遂げたときの喜びは大きい。
珠子　私の敵は、私の心なのね。

処刑場。

教徒１　私たちは天に恥じる行いは何一つとして行っておりません。
教徒２　天下太平などとは真っ赤な嘘偽りだ
三成　黙れ！
教徒３　あなたの行っていることは間違っている。
ひで　何が正しいかを決めるのはあなたじゃ無い。何が正しいかは、わたしが決めるわ。

座敷牢。

神父１　ヒトは生まれながらにして罪を背負って生まれてくるのです。それを洗い流すために

天主教では儀式を行い、新しい名を得るのです。

珠子　罪。

神父１　はい。

珠子　その名をもらったら、罪は、なくなるの？

神父１　いいえ。なくなりはしません。ただ、許されるのみです。

珠子　許される？

神父１　天主さまによって、許されるのです。そしてそれをあなた自身が受け入れ、自分を、そして他人を、あなたが許すのです。

処刑場

ひで　もういいわ。飽きちゃった。なに言っても無駄だわ。この人達、洗脳されちゃってるんだもん。

三成　はっ。お前達はこの国の歴史に、世を乱した謀反ものとして記される。皆すぐに忘れ、誰もお前達のことなど覚えていないだろう。

神父３　そうして！　強いもの、勝ったものの言葉だけが残っていくと思われないことです。

いと　私たちの信じるもの、私たちの思いを表すための言葉があり、それは失われない。私達の祈りは、きっと未来に届く。

神父２　さあ、天主様の教えに従い、自分の処刑を命じた人と処刑にかかわったすべての人を許しましょう

ひで　何それ、気持ち悪い人達。ふん、最期に好きなだけ、お祈りでもするといいよ。

信仰に殉ずる人々。

■十一場（洗礼）

夜、寝ている珠子。

珠子　いと・・・いと！（悪い夢を見て飛び起きる。）

神父１　（後ろから）珠子さま

珠子　あなたは！

神父１　しーっ！

珠子　処刑があったと聞きました。よくぞご無事で。

神父１　ええ、私は何とか。信者の方々が守ってくださったので。しかし、あの２人は・・・。

珠子　そうですか。・・・あの、いとには会われましたか？
神父１　ええ。・・・これを。マリアの、いとさんの形見の品です。珠子さまにと。
珠子　いとが・・・？
神父１　これからも、あなたとともにあります、と。あなたは独りではない、と。
珠子　いとは、死んだのですか。
神父１　はい。最期まで凜とした方でした。
珠子　いとは、私は、ひとりではない、と？
神父１　はい。・・・受け取ってくださいますか。
珠子　（受け取って）いとの、マリアの思いは、私の中に根付いております。
・・・儀式を、受けさせてください。私も天主様の教えのもと、生きていきます。
神父１　では。略式ですが。
珠子　ええ、かまいません。

洗礼を受ける珠子。殉教者たちの祈りの言葉が響く。

神父２　主は天にいませり。
教徒１　地には平和を。
教徒２　人の心には愛を。
神父３　そして未来には、希望を。
いと　世界に、恵みが満ち溢れていることを。

珠子　神父様。私には何ができるんでしょうか。
神父１　それは、あなたがみつけてください。
この世は神の恵みに満ちているのです。この座敷の中にも、光は届く。
細川珠子。あなたは父から与えられた名前ではなく、新しく神から与えられた名前を名乗りなさい。
珠子　新しい名前…
神父１　ガラシャ、と。マリアと一緒に考えたのですよ。神の恵み、という意味です。
珠子　はい。私は・・・細川、ガラシャ。

■十二場（歩み寄り）

忠興　珠子。
珠子　忠興さま。…おかえりなさいませ。
忠興　ああ。今、帰った。

珠子　…。
忠興　（十字架に気付いて）お前、その首の物は・・・。
珠子　はい。天主の儀式を受けました。ガラシャ、と名前を授かりました。
忠興　そうか・・・。
珠子　怒らないんですか？
忠興　もういいのだ。ひで様が亡くなられた。だから、もういいのだ。
珠子　はい。
忠興　・・・ガラシャといったか。
　　お前が細川ガラシャならば。私の妻の珠子はどこに行ったのだ？
珠子　ここにおります。
　　ガラシャとは、これまでの私を見つめ直すための、もう一人の私の名前。
　　いとが、つけてくれたのです。
忠興　見つめ直して、何かみつかったのか。
珠子　ええ。私が愚かだったことを。私の周りの人への、感謝の気持ちを。
　　いとも、他の侍女や輝清たちも、父上様も。あなたも。
　　皆、私に手を差し伸べてくれていたんですね。私はそのことにずっと、気付かなかった。
　　馬鹿だったんです。こんなにたくさんの人に守られて、助けられて、生きていたのに。

珠子と縁のある死者たち（光秀・いと）がゆっくりと現れる。

珠子　お父上様、（以下順に、珠子とセリフを重ねて唱和）
光秀　明智光秀は、明智の家を守るために、子孫に未来を渡すために、勝負に挑んだ。
珠子　いと、
いと　マリアは、この閉じた座敷に光をさしこませて、道を示して
珠子　いつも寄り添ってくれた。そして、あなたは・・・。
忠興　お前を守ろうと思っていた。守っているつもりだった。
　　だが、いとの言葉をずっと考えていた。しかし、この、争いに満ちた世界では・・・。
珠子　ええ、あなたの苦しみ、今ならわかります。
　　私はこれまで、この世の全てを憎んできました。
　　父を恨み、あなたを恨み、自分に無い自由を謳歌するひで様をねたんで、
　　何も無い自分をさげすんで。そんな自分がなによりも嫌いでした。
　　でも、それを全部許してあげよう、と。
忠興　すまない。
珠子　何を謝ることがございましょうか。あなたは私の命を守ってくださった。
　　謝るのは私の方です。
忠興　珠子

珠子　私は、ここに閉じ込められていたのでは無く、自分で閉じこもっていたのです。
忠興様、争いに充ちた世界でも、それでも世界は美しい。
忠興　そうだ。お前がいると思うだけで、俺は世界を美しいと思うことができたんだ。
いと　置かれた場所で咲きなさい。
無理に手を伸ばしても、指の間からこぼれ落ちていくだけ。
自分の手の中にあるものを、しっかりと握りしめて、離さぬように。（皆、去っていく）
忠興　すまない。しかし、まだ、外には出してやれないのだ。ひで様が亡くなった。
また世が乱れる。戦の世に戻るかもしれぬ。俺はまた、お前を犠牲にして家を守らねば
ならんかもしれん。
珠子　はい。
忠興　しかし、お前が自由に外を歩ける、そんな日を必ず手に入れてみせる。
珠子　はい、私はもう大丈夫です。あなたの心を信じています。
忠興　ああ。・・・約束しよう、お前の求める戦の無い世を。俺も信じたいのだ。
次の天下人の意向によっては天主教徒の処遇も変わるかもしれない。けれどまずは誰が
次の天下を取るか。それが定まるまで。
珠子　はい。それまで、ここでお待ちしています。
忠興　戦はどう転ぶかわからぬ。座敷から一歩も出るでないぞ。
珠子　・・・お待ちしています。どうかご無事で。

忠興、去ろうとして立ち止まる。

忠興　・・・お前はお前の信じたいものを信じればいい。俺も、お前を信じている。

忠興去る。深々と頭を下げる珠子。
足音。石田三成が武士数人を連れて現れる。
舞台反対側に徳川康子が別の武士達をつれて現れる。

康子　鳴かぬなら。鳴くまで待とう、ほととぎす。
時は慶長5年、豊臣ひで亡き後。天下は再び、新しい天下人が現れるのを待っている。
私だ。私は待った。十分に待った。今、ほととぎすが鳴くときだ！
三成　そんな馬鹿な。次は私の番のはず！
康子　天下はすでに、私に向けて傾いてきているのだよ
三成　ふざけるな！　徳川なんぞに渡すものか。
この石田三成、ひでさまのご遺言のもと、豊臣政権を任されたのだ！

待っていただと？　私こそ、ずっと待っていたのだ、ひで様の夢見た、新しい世界を！
・・・どんな手を使ってでも！　私は勝たなくてはならないんだ！

走り去る石田三成とその部下達。徳川康子のもとに武士２人駆け込んでくる。

武士１　殿！　石田三成が大阪にて兵を挙げました！
武士２　少しでも味方を増やそうと、大阪に住む大名の屋敷を襲い、人質を狙っております！
康子　狙われているのは、誰だ
武士２　丹後の大名、細川忠興さまのお屋敷！　・・・そこに住む奥方の、珠子さまです！
康子　細川殿！　・・・間に合わんか。

走り去る徳川康子とその部下達。

■十三場（襲撃）

座敷にて、珠子のもと、しの・ちよ・輝清が控えている。

輝清　珠子さま。忠興さまからの応援は間に合わず、屋敷が囲まれつつあります。
珠子　皆、お逃げなさい。
ちよ　ガラシャさま！　ガラシャさまを残して逃げるなど、できません
しの　さもなくば、三成の人質になるという手もあります。人質というからには、命は守られるはず。
珠子　できません。忠興さまは既に、徳川さまの側について戦に出ています。その足を引っ張るような真似は、できません。
ちよ　でも・・・。
珠子　私が屋敷から出れば、それこそすぐに追っ手がかかって捕まってしまうでしょう。
ちよ　でも、でも何か、あるはず
珠子　私は…もう逃げません。あなたたちは宇喜多のお屋敷に逃げなさい。そちらに駆け込めば、悪いようにはなさらないでしょう。私がどんな風にしていたか、忠興様に話す人がいなくては、忠興様も寂しいでしょうから。ね？
しの　ガラシャさま…。
珠子　輝清、お願いします。
輝清　はっ。（輝清・侍女達去る。）
珠子　・・・達者でね。

珠子　いと・・。私、あの人を守りきれるかしら？
天主様、私に力を、勇気をお与えください。

石田三成が現れる。

三成　細川珠子だな。
豊臣ひでさまの配下、大阪五奉行が一人、石田三成。ひでさまの後を継ぎ、私が天下をとる。人質として一緒に来てもらおう。
珠子　三成殿、招かれもせずに屋敷に土足で踏み込むとは、無礼ではございませんか。

三成配下の武士達、いきりたち一歩踏み込み包囲を狭める。
即座に三成が手をあげて制する。

三成　これは失礼。（重ねて制する仕草。武士たちは下がり、袖幕の際で控える）
珠子　ここの主は私です。私はここを動くつもりはありません。
三成　たいした度胸だ。さすがは明智の娘。己の立場もわきまえず、ずぶとい神経だことよ。
細川殿の裏切りもそなたがそそのかしたのか？
珠子　お黙りなさい。私の夫は裏切り者ではありません
三成　ひで様にあれだけ世話になっておきながら、ひで様亡き後真っ先に徳川方につくとは、
そなたの夫は裏切り者だ。
珠子　夫には夫の考えがあるのです。
三成　何を考えることがあろう。ようやく太平の世が来たというのに！
珠子　太平の世ですって。あんなにたくさんの人を処刑しておきながら？
三成　処刑？
珠子　誰もが穏やかに暮らせる時代。それを太平の世と呼ぶのではありませんか
三成　ははは。部屋に閉じこもり世間を知らぬ、お姫さんの戯言よ。
そんな理想で治められるほど、世の中は甘くはないんだよ。
珠子　あなたに理想はないのですか。
三成　この世を、豊臣政権を長続きさせること。ひで様の夢見た世界、私が作りあげてみせる。
珠子　そのためにもう一度、戦を始めるのですか。たくさんの希望や未来を踏みにじって。
三成　理想の実現に、犠牲はつきものだ。
珠子　あなたのおっしゃるものは、理想ではありません。三成殿、ひで様はもういないのです。
三成　ならば、理想なぞ無くてよい。
珠子　理想が無ければ、信じるものがなければ、生きる意味などありません。
三成　おのれ、生意気な。

珠子　かわいそうな三成殿。まわりから生き方を決められて、あなたはそれに応えているだけ。
自分のなさっていることが、わかっていないのです。
三成　ふざけるな
珠子　でも、それでも。私はあなたを許します
三成　…なに？

虚を突かれた三成の隙をついて、珠子、紙をばらまく。

珠子　「散りぬべき　時知りてこそ　世の中の　花も花なれ　人も人なれ」
三成　馬鹿な。何をするつもりだ・・・！

燭台を手に取り、三成につきつける。

珠子　あなたはわたしです。
守られて、導かれて、与えられた命の意味に、それでも気付かないでいた私。

珠子、燭台を落とし火を放つ。火勢の上がるSE。
周囲に控えていた武士達、炙られてひるむように退き、袖へ。

三成　黙れ、うるさい！　私が天下を取るんだ！
珠子　女一人、座敷牢から連れ出すこともできなかった人に、天下がついていくと思いますか。
三成　・・・！
珠子　あなたに私の夫を。忠興様が生きる、この美しい世界を。好きにはさせません。
私は私の信ずるものの為に、生き、死にます。
三成　細川珠子！
珠子　さようなら、三成殿。あなたにも。自分を許すことが出来る日が、来ますように。
三成　くそぉ・・・っ！

三成が逃げ去る。

珠子　忠興様・・・

建物の崩れる音。暗転。

■ＥＤ

忠興が、今は跡形も無くなったガラシャの座敷牢の前にたたずんでいる。

忠興　珠子・・・結局お前を守ってやれなかった。

ふと何かに気づいたように振り替えるが、そこにはなにもない。諦めたように天を仰ぐ。

忠興　新しい時代の者よ。そこはどんな世界か。穏やかに生きているか？

・・・ガラシャの花は咲いているか。

夫の傍らにガラシャがいる。

忠興に寄り添い、忠興の視線をたどるように遠く（未来）を眺める。

祈るように、未来を見つめる二人。

幕。

CAST

細川珠子

細川忠興

いと

しの

ちよ

輝清

明智光秀

織田信子

豊臣ひで

石田三成

徳川康子

神父1

神父2

神父3

武士・人々など複数名